

野本論文の要旨とコメント

聖泉短期大学

学 長 本 多 正 昭

A. 要旨

I. 問題の所在

客寄せの迎合姿勢に走って、教育理念を喪失した大学は、21世紀には生き残ることが出来ない。

今、各大学に求められているものは、「大学の自己目的と個性」であり、「選ばれる大学への変身」である。

本学も、教育理念の再構築が緊急課題であるが、以下マーケティング理論を応用し、社会的ニーズに最適と思われる教育理念を推論し、その具体例を提示したい。

II. 本学における教育理念

短大は全国的に、自県内からの進学率が60%弱と、地域性が高い。

また、滋賀県は産業構造を考慮しても、特定の職種だけに強い人材よりも、全職種型の人材を求めている。これらを踏まえ、本学のあるべき教育理念を推論すると、次のようになるだろう。「人格陶冶の課程と専門教育との有機的な結合により、適性豊かな職業人として地域社会に貢献できる人材を育成する。」

III. 聖泉教育の理念とその具体化の方法

(1) 人格陶冶とキリスト教主義

(2) 両学科と有機的に結合した一般教育

イ. 人格の主体的素養は、キリスト教教育によって

ロ. 国際的な一般教養—日本の国際関係における理念の構築

ハ. 西洋文化から脱却し、日本文化を再生させる

ニ. 学問の基本的方法の確立

(3) 創造性に富む適性豊かな職業人の育成

IV. 聖泉教育理念の具体例

～カリキュラム編成の問題について～

商経科・英語科のカリキュラムに、教育理念をどう現わすか。

「適性豊かな」とは、「体系的学理とその論理的展開能力を備えた」の意であ

り、「実践的知識・技術」の面を意味しない。

現行の商経科カリキュラムは、学理体系がしっかりしていない。

理念は校務のあらゆる面に生かされねばならない。

V. 結び—本学の急務

「教育理念が不明確なまま、教員個人の授業がただ集合している大学から、十分検討された理念とカリキュラムに基づく組織的、体系的、機能的な教育を行なう大学への転換」

B. コメント

平成4年4月1日、聖泉短大の法的母体である学校法人は、聖隷学園から聖ペトロ学園に移管され、理事長も学長も交替し、聖ペトロ学園・聖泉短期大学として再出発することになった。もちろん、開学から法人移管までの7年間の間に培われた聖泉短大のよき慣習は継承してゆかねばならぬが、移管を機に、大学の自己点検・自己評価を行ない、聖泉短大の歩むべき方向を再検討することは、まことに時宜を得た試みであり、学長として緊急赴任した私にとっては、最優先の課題であった。

そこで、現有勢力の中から、この重大な課題に関する英知を集めつつ、学長として聖泉短大のアイデンティティ確立の道を明らかにするため、学長懸賞論文を募集した。応募論文は、ただ一篇あるのみであった。私は平成5年度も、同じ趣旨で同じ懸賞論文の募集を続けたいと思っている。

さて、今回の応募論文は、野本茂商経科講師（現・助教授）のもので、私なりにまとめた要旨は、上述の如くである。これは聖泉短大の焦眉の課題に真向から取り組んだ真摯な論考である。入試委員長としての重責を負いつつ、それゆえにこそ、いわば肉体化されたテーマとして表出されたものと思われる。一般的理論と特定の具体的現実を切り結ぶ相互媒介的な研究態度を、私はとくに高く評価したい。

なお、一般の学術論文のレフェリーのような態度で本論文についてのコメントを行なうつもりはないが、私個人の視点から、次の2点に短く言及しておきたい。
第1点 著者のキリスト教観と仏教観について

神とは「理想の自我を現実化したもの」として語られることがあるが、これは俗説である。「理想の自我」とは、自我から出発し、それが拡大深化された観念ないしイメージである限り、本質的には自我的なもの、自我の限界内の観念（イデー）に外ならない。

そのような神は、イデオロギー的な神で、個人によって、集団によって、民族

や国家によって、さまざまな唯一神として祭り上げられうるものである。真の神は自我的なもの一切を否定的に超越した実在でなければならない。神と出会うためには、ひとたび徹底的に自我が放棄せしめられることが必要なのであり、従って我々に要求される第一のものは離脱である。自我から連続した神ではなく、徹底的な非連続を媒介として、はじめて連続の関係が恵まれるのであって、「真の宗教はイデオロギーではない」と云われるのは、この意味においてであろう。

また、「仏教の哲学は無である」と書かれているが、仏教的無は、決して虚無ではなく、逆に充満する実在の世界であって、無我というのも、自己の虚無化ではなく、真の自己（仏）の自己実現の姿であるから、主体性というなら、無我こそ究極の主体性であろう。

第2点 「西洋文化からの脱却と日本文化の再生」の項について

内容についての議論は避け、故、アーノルド・トインビーが第2次世界大戦直後に行なった、ある連続講演の最終回結びの言葉を御紹介し、コメントというよりも、コメントのヒントにさせていただきたい。彼は次のように予言していたのである。「今から1000年後の歴史家が、この20世紀について書くようになれば、彼は民主的自由主義と共産主義政治に関する国内論争などには興味がなく、歴史家の心を本当に掴むものは、史上初めてキリスト教と仏教が深く浸透し合ったとき、何が生じてきたかという問題であろう」と。今や、西洋が東洋に学びつつある時代でもある。カトリック第2バチカン公会議も、キリスト教のヨーロッパ中心主義からの脱却の姿勢を力強く宣言し、東洋やアフリカ、南米における伝統的宗教文化との対話・交流の必要性を訴えている。

このような観点から、著者の指摘には大いに賛成であり、本学の有機的教育体系に、こうしたテーマをどう反映させてゆくべきか、ともに考えてゆきたいと願っている。